

大大阪時代における道頓堀

大阪工業大学大学院 学生員 ○福田 明文
 大阪工業大学 正会員 吉川 眞
 大阪工業大学 正会員 田中 一成

1. はじめに

江戸期以来、道頓堀界限は歌舞伎や浄瑠璃が興行される演劇の街として栄えてきた。その歴史は江戸時代に舟運や利水のために堀が開削された後、その南側に芝居小屋が移されるなど界限の街づくりが始まった。とくに大正時代は、カフェや洋食屋などの近代建築も立ち並び、モダンで華やかな大大阪時代であったとされる。この大正時代には、第一次都市計画事業で道路の拡幅と橋梁の架け換えも行われている。

水都と称されてきた大阪は、戦後の高度経済成長期に堀川の埋立が行われるなど、そのイメージを変容させてきた。しかし、道頓堀は今も水都を象徴する堀川であり、戦後は「食い倒れ」と「巨大看板」が道頓堀界限のイメージともなってきた。そのイメージも本年（2008）5月に角座が閉館し、看板人形で有名な飲食店「大阪名物くいだおれ」も7月に閉店することになっており、ますます変化することになる。「情緒ある芝居の街から、若者や外国人の街に変わってしまった」と嘆かれている。

一方、近年では、市内に残された水の回廊を活用して「水都大阪」を復活させるさまざまなプロジェクトや、商業施設の中に大正時代の街並みを再現する試みなど、かつての賑わいを取り戻そうとする動きも見られる。このような背景を持つ道頓堀は今も昔も大阪の象徴であり、その歴史の変遷を把握することで大阪の都市変容を把握できるとともに、人々の大阪への関心を高めることができると考えている。

2. 研究の目的と方法

本研究では、散在する史料や資料を収集し GIS（地理情報システム）を用いて整理・蓄積することで、道頓堀の歴史の変遷を把握することを目的としている。さらに、この過程で得られる知見や資料が、人々の大阪への関心を高め、新たな史料となることも目指している。具体的な方法として、収集した古地図、旧版地図、地籍地図などを現代空間上に定位し、GIS アプリケーションを用いてオーバーレイするなどの操作により、歴史の変遷の把握や地域特性の抽出を試みている。さらに、より視覚的に把握するために CAD/CG を用いて大大阪時代の道頓堀を3次元モデルとして構築することも試みている。

3. 道頓堀の起源

道頓堀は、木津川と東横堀川の上に位置している（図－1）。その歴史は、豊臣秀頼によって開削が命じられ、安井道頓らが私財を投じて建設したことから始まったとされる。開削後は堀に沿って家屋などの建設が行われ、1626年に現在の南船場周辺から芝居小屋が道頓堀の南側に移設され、演劇街の幕開けとなった。また、浪花座、中座、角座、朝日座、弁天座は道頓堀五座と呼ばれ、演劇を楽しむ人々で賑わっていた。このように道頓堀は、五座を中心に芝居茶屋などの飲食街も発達してきた。角座の閉館により五座は全て消失するが、道頓堀界限は現在も大阪有数の繁華街である。



図－1 道頓堀

キーワード 歴史の変遷 GIS CAD/CG 地価

連絡先 〒535-8585 大阪府大阪市旭区大宮 5-16-1 大阪工業大学大学院 TEL 06-6954-4109

4. データベースの構築

江戸時代から現代に至るまで道頓堀界隈の歴史の変遷を把握するにあたって、収集した古地図や旧版地図を GIS アプリケーションである SIS (Spatial Information System) を用いて幾何補正し、現代図上に定位した。定位に用いた現代図は大阪市デジタルマッピングデータ (1/2500) であり、幾何補正のための GCP (Ground Control Point) には大阪城の堀や寺社仏閣などを用いた。地理空間情報として定位した時代は、元禄年間 (図-2)、天保年間、明治中期、明治後期、昭和初期、戦後復興期、高度経済成長期の 7 期である。



図-2 元禄 16 年の道頓堀街

5. 地価マップ

繁華街は必然的に地価が高く、道頓堀界隈は現在も大阪市の代表的繁華街である。そこで、地価マップを作成した。大大阪時代の地価マップ作成には、明治 44 年の「地籍台帳・地籍地図〔大阪〕」を用いた。なお、台帳に記載されている当時の地価を現代の貨幣価値に換算している (図-3)。また、現代の地価マップは路線価を用いて作成した (図-4)。地価マップをみると、明治 44 年では五座周辺は地価が高く演劇の街であったことがわかる。さらに、現代では堺筋より東側の地価は、御堂筋の西側より低くなっていることもわかる。

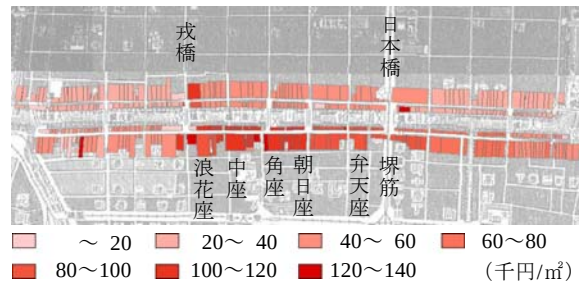


図-3 明治 44 年の地価マップ

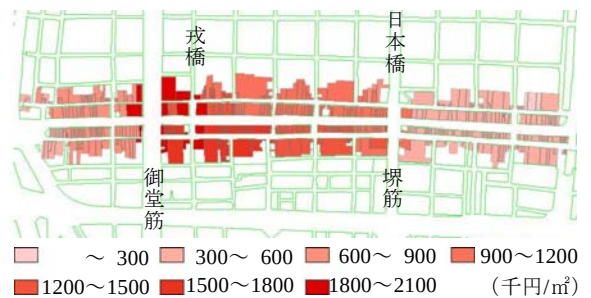


図-4 現代の地価マップ

6. 3次元モデルの構築

大大阪時代の道頓堀をより視覚的に把握するために、道頓堀通りの 3 次元モデルの構築を行った (図-5)。なお、大正 9 年に発行された雑誌「道頓堀」に描かれているスケッチを参考にしている。大大阪時代の道頓堀を 3 次元化することによって、より視覚的に把握することができ、人々の大阪への関心を高めるなど、その有用性は高いと考えている。



図-5 3次元モデル

7. おわりに

道頓堀界隈の地理空間データベースを構築したことにより、道路の拡幅や堀川の埋立など、の現在に至るまでの都市形成過程の一端を垣間みることができた。また、地価を対比させることにより、位置的な重要度を把握できたと考えられる。GIS を用いて歴史の変遷を把握し、過去の道頓堀を知ることにくわえて、3次元モデルを構築することによって、より人々の大阪への関心を高められるのではと考えている。

今後の課題としては、他地域との地価マップの比較も必要であり、3次元モデルの精度の向上と添景の配置なども必要であると考えている。

参考文献

- ・地籍台帳・地籍地図〔大阪〕 柏書房 2006
- ・橋爪節也 モダン道頓堀探検 創元社 2005